

# 新発見の坂本龍馬の書簡(慶応3年11月10日中根雪江宛て)への松岡司氏の疑問に対する見解について

## 坂本龍馬書簡への松岡司氏の疑問

## 疑問に対する志国高知幕末維新博推進協議会の見解

【疑問1】  
報道によるとこの書簡の天地幅は16センチ。ところが同日の林謙三宛て龍馬書簡は19.4センチ。同日なのに紙の大きさが全く違っており、疑問。

現存する龍馬の書簡を見ると、様々な縦の寸法がある。大きく分類すると、16cm前後と、19cm前後、25cm前後の三種類となる。これらをどう使い分けていたかは明確でない。  
近日付で見てみると、11月7日陸奥宗光宛ては19.5cm、13日同じ陸奥宛ては19.0cmで、これらは林謙三宛てとほぼ同じ。しかし、同じ頃に書いた新政府綱領八策は15.1cmで、明らかに別の寸法の紙を利用していたことになる。

【疑問2】  
龍馬の真筆書簡は10日付、11日付とも50センチ前後の切紙一枚を中心にした2、3枚で継がれる。ところが長さ92.5センチのこの書簡は、6枚か7枚の小紙片をもって継がれている。まるで小児の折り紙を使ったかのような紙継ぎがなぜされているのか。

6枚の紙を継ぐということは5箇所、7枚だと6箇所の糊付けがあることになる。  
実際には、2箇所の糊付けで、3枚の紙を継いでいる、ごく平均的な紙継ぎである。

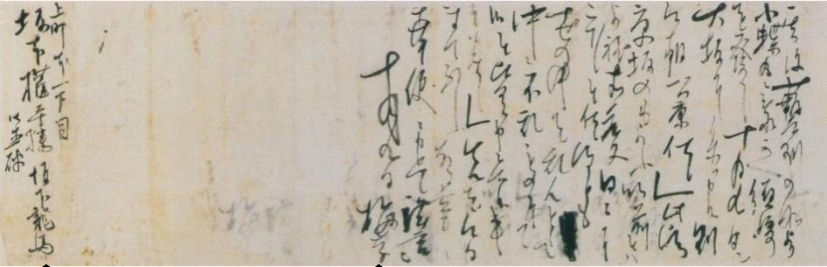
【疑問3】  
慶応3年10月から12月までの越前藩前藩主松平春嶽らの動静を探る史料に、側近中根雪江の著した「丁卯(ていぼう)日記」がある。同日記には、龍馬についても、10月28日の福井来訪から11月15日の前夜来宅、同16日の前夜暗殺などが詳記される。宛先が日記の筆者中根雪江であるのに龍馬の書簡を受け取ったと10日の日記になぜ一言も書かれぬのか。

訪問者や送られてきた書簡、情報のすべてを日記に記録していたように言うが、現代の誰が中根のすべての来訪者・来翰を知っているのか。確かに中根は多くの情報を記録しているが、多くを記録している日を見ても、それがその日に会った人すべて、送られてきた書簡や情報のすべてと誰が証明できるのか。「丁卯日記」の11月13日の項目は全く何も書かれていない。大政奉還後の11月8日に、春嶽公のお供として京都へ到着して、早々に休みでも取って誰とも会わず、誰からも書簡が来ず、情報も入らなかったのだろうか。そんなはずはないものと思われる。おそらく、中根は書くべき事と、そうでない事を選択して日記に記していたと考えべき。中根に限らず、日記とはそういうもの。また、この「新国家」の書簡は、「新国家」という言葉に注目が集まったが、内容は一日も早く三岡を新政府に出仕させてほしいというもので、「越行の記」に記している福井で話した内容を越えるものではない。そのため、「丁卯日記」に改めて書く必要がなかったのではない。他の人の記録と照合することは必要な作業だが、記録が無いからと言って、即、疑わしいというものではない。

【疑問4】  
「才谷椽太郎」の変名を使い、かつ「披」を「破」の如く書く龍馬の癖が出ていることから、この封こそ龍馬の自筆ではないか判断している。この封のサイズは、縦16.6、横5.1センチ。この書簡の宛先が中根雪江で、天地幅が16.3センチしかなかったのは、この封を活用するために合したという疑いが生まれる。  
この封がいっ使われたものなのか。慶応3年10月28日、龍馬は後藤象二郎の名代として、主君山内容堂の直書を持って福井に到着し、中根雪江にこれを差し出している。中根の日記からも才谷梅太郎の変名で雪江を訪ねたことがわかる。つまり、先の封にはこの容堂の直書が収められていて、それを春嶽に上げる際に封から取り出し、空の上封だけが中根家周辺に残った、と考える。封が、「才谷椽太郎」なのに書簡が「龍馬」となっているのもこれで説明がつく。

推測の上に推測を重ねたもの。まず、山内容堂の書簡を持参したことは確かだが、その書簡の上封を龍馬が書いて中根に渡した、という事実は確認できない。しかも、容堂の直書が「新国家」の書簡の封とぴったり一致する、という事実も確認できない。そして、封だけが中根周辺に残っていたことも確認できない。「新国家」書簡がもし偽物であれば、内容から考えて、「越行の記」が発見された後に作られたもので、最近の作ということになる。150年近く経って、中身がないのに、封だけが都合よく発見される可能性は、極めてまれ。何かの資料が群として大量に発見された時には、中身の無い封だけが見つかることはある。しかし、近年、中根のそういう資料群が見つかったという情報はない。  
また、封の名前と書簡の名前が違うことにも違和感を示されているようだが、龍馬の後半生には、よく見られる。現在よく見られる龍馬の書簡は、封と書状が一体化した書簡(封紙がなく、書状の右から紙を巻いていき、書状本文の最後に署名と日付、宛名を書いた後、左にある程度の空白を作って、文字が隠れるように包み込み、封をし、さらに宛名と署名をしたもの)である。  
現在、多くの龍馬の書簡は表装されているため、別になった封紙は、現存していないことが多い。封と書簡の署名の違うことに違和感を持つのなら、多数の龍馬の書簡が疑わしい文書になってしまう。署名が違う例は別表のとおり。(※左の表を参照)

【具体例】 慶応3年10月9日兄・権平宛て(複製) (真物は京都国立博物館所蔵)



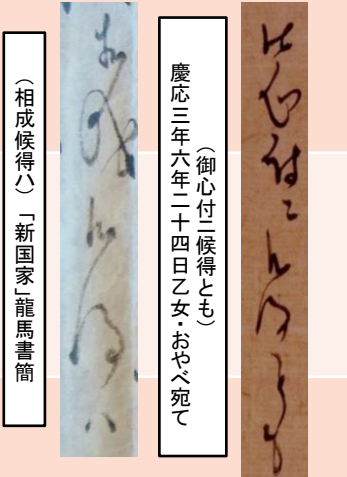
封をした後の表部分

梅太郎

別表 署名が違う書簡例	
封と書状が別のもの(未表装)	慶応3年8月21日 岡内俊太郎宛て
慶応3年5月5日 三吉慎蔵宛て	書状=龍馬
書状=龍馬	封 =椽(梅の旧字)
封紙=直柔	慶応3年9月13日 陸奥宗光宛て
慶応3年5月17日 三吉慎蔵宛て	書状=龍
書状=龍	封 =椽太郎
封紙=直柔	慶応3年10月9日 坂本権平宛て
	書状=梅太郎
	封 =坂本龍馬
封と書状が一体のもの	慶応3年春頃 伊藤助太夫宛て
慶応3年6月10日 木戸孝允宛て	書状=龍
書状=龍馬	封 =才谷
封 =才谷	慶応3年2月頃 伊藤助太夫宛て
慶応3年8月19日 岡内俊太郎宛て	書状=龍馬
書状=龍	封 =坂本
封 =椽太郎	

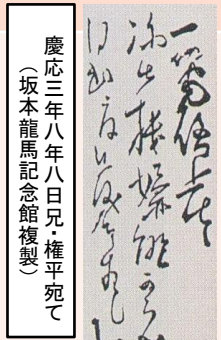
# 新発見の坂本龍馬の書簡(慶応3年11月10日中根雪江宛て)への松岡司氏の疑問に対する見解について

坂本龍馬書簡への松岡司氏の疑問	疑問に対する志国高知幕末維新博推進協議会の見解
<p>【疑問5】 元福井藩士の家から入手したというが、その家の名は明らかにしていないことに不審を抱く。</p>	<p>所有者の意向もあり、越前福井藩のゆかりのあるところ由来しているとしか言うことはできないが、出所について疑問に感じるところはない。 博物館では、様々な理由で所蔵者の情報や入手経路を明かせないことはある。高知県でも同様。県立坂本龍馬記念館が今年7月に発表した慶応2年12月4日坂本権平一同宛ての書簡も、所蔵者情報や入手経路は一切公にしている。</p>
<p>【疑問6】 筆勢を大きく欠いている。 特に「の兵を得たる」の、変体仮名を含む仮名交じり文が、よろよろと絡みつくように書かれている。また、「相候得ハ」「相成候得ハ」「候と奉存候」という「候」の出る通常であれば一気連綿の表現箇所が、遅筆かつほとんど単体同然に書かれており違和感がある。</p>	<p>それほど大きく筆勢を欠いているとは思われない。筆勢の弱い書簡はいくつかあり、中でも、慶応2年11月の溝淵広之丞宛て2通の方が筆勢を欠いている。また、「候」が「遅筆かつ単体同然に書かれている」ような「候」の例は多数ある。例えば、慶応3年6月24日乙女・おやべ宛て(京都国立博物館所蔵)で国の重要文化財に指定されている、現存する最長の5メートルの書簡でも、何度も同じような「候」が登場する。どちらかといえば、「新国家」書簡の方に筆勢の強さを感じる。</p>
<p>【疑問7】 墨継ぎの行数が他の真筆に比べて短すぎる。3、4行ごとのはずの墨継ぎが2行にすぎないのは、要するに似せようとして遅筆になったせいではないかと疑う。</p>	<p>明らかに丁寧に書いた書簡なので、墨継ぎが多くなるのは必然。</p>
<p>【疑問8】 (龍馬の書簡を鑑定するに当たっての重要な視点として)龍馬が書いた巻紙書簡には、やや左へ流れる癖があるが、この書簡には見られない。</p>	<p>基本的には下の方が左へ流れる傾向が強いが、すべてが左へ流れるわけではない。 右へ流れる書簡も存在する。 ・慶応2年11月16日 溝淵広之丞宛て(県立歴史民俗資料館寄託) ・慶応3年8月8日 兄・権平宛て(原本存在せず、写真からの複製が坂本龍馬記念館蔵) ※冒頭、「一筆啓上仕候」で始まっており、右へ流れている。今回の書簡と全く同じ。</p>
<p>【疑問9】 (龍馬の書簡を鑑定するに当たっての重要な視点として)相手がだれであろうと無造作に行う抹消・加筆がこの書簡には見られない。</p>	<p>龍馬はかなり細やかな気配りをする人物である。「相手がだれであろうと」などという認識は間違っている。 抹消・加筆は、それが許される相手・場面だけに見られるものであり、龍馬は、T. P. Oによって使い分けをしている。龍馬は相手をかなり意識して手紙を書く。宮内庁書陵部に残る木戸宛ても、抹消・加筆はほとんどない。</p>
<p>【疑問10】 追記された新書簡の末尾に一カ所加筆があり、この部分だけは前の行を右へ流す。遅筆でありながらこのようになっているのは龍馬書簡の特徴を出すべく最初から工作しようとしたためではないかと疑う。</p>	<p>尊敬の念が込められた「大兄」(中根を指す)を次の行の頭に持っていくため、計算して書いているので、追伸の文字も最初から下の方を寄せて、「御座候得ハ」のスペースを作ったと考えられ、何も不自然ではない。</p>

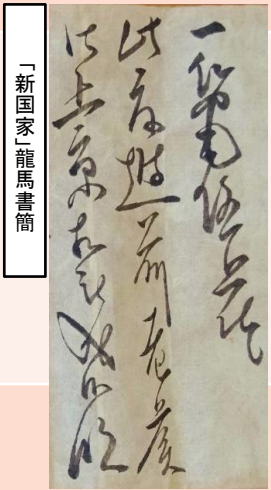


「相成候得ハ」「新国家」龍馬書簡

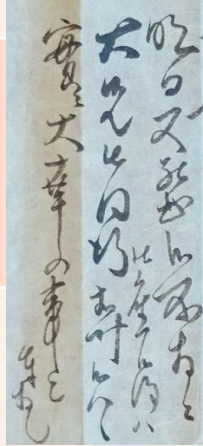
慶応三年六月二十四日乙女・おやべ宛て (御心付二候得とも)



慶応三年八月八日兄・権平宛て (坂本龍馬記念館複製)



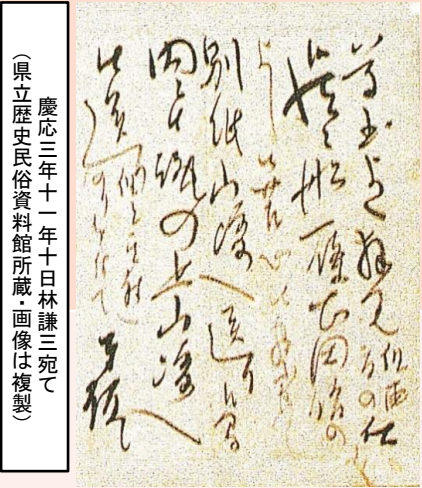
「新国家」龍馬書簡



「新国家」龍馬書簡

# 新発見の坂本龍馬の書簡(慶応3年11月10日中根雪江宛て)への松岡司氏の疑問に対する見解について

坂本龍馬書簡への松岡司氏の疑問	疑問に対する志国高知幕末維新博推進協議会の見解
<p><b>【疑問11】</b> 龍馬の各文字の結体はよどみがなく、横画(横線部)をとっても、一気に筆が走ってピタリと止まるか、思い切り良く転折する。新発見の龍馬書簡の「越」「上」「三」などと、同日付の別の龍馬書簡に見られる「一」「送」「道」などの収筆を比較すると違っていることがよく分かる。</p>	<p>「新国家」書簡の方が、横線に限らず、全体的に一文字一文字、終(収)筆がしっかりしており、普通の「フワッ」とした龍馬の文字と印象が違う。終筆というものは、何も横線だけに限るものではない。松岡氏が指摘する同日の龍馬真筆の最初の数行の「尊書よく拝見」の「見」や4行目「別紙」の二文字など、終筆は適当である。縦横に関わらず、起筆(打ち立て)・終筆(止め・はね・ほらい)は適当なのが普通の龍馬の特徴である。「新国家」書簡は比較的、起筆・終筆がしっかりしているため、少し印象が異なる。起筆・終筆をしっかりする理由としては、他藩重臣宛てというだけではなく、中根の後ろの松平春嶽を意識しているからと考える。</p> <p>おそらく龍馬が他藩の藩主クラスの人を意識して書いたものは、「新国家」書簡が初出ではないか。しかも、春嶽は普通の藩主クラスの人物ではない。幕府の政事総裁職を務めた経験があり、尊敬できる人柄と知識を持ち、龍馬が最も期待を寄せる人物である。そんな人に訴えたい内容を書いたら、文字も改まって何ら不思議はない。</p>
<p><b>【疑問12】</b> 「恐」の文字が「恐」の崩しといえず、一見、ㄥが上部にあることにより「戀」の略字の如くに見える。日々「恐々」「誠恐」を書き慣れている龍馬がこのような誤った崩し方をするはずがない。</p>	<p>「恐」の崩しは、①慶応3年9月初旬佐佐木高行宛てや、②慶応3年9月20日木戸孝允宛ての「恐」と非常に似通っている。新発見の龍馬書簡と三点とも同じ人の筆跡と考えられる。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">    </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center; margin-top: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">「新国家」書簡</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">①</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">②</div> </div>
<p><b>【疑問13】</b> 個々に見た際、龍馬の「龍」はよいが、「馬」の崩し方に問題があるのではないか。</p>	<p>似たような崩しは何度も書いている。</p> <p>※例: ①文久3年5月17日坂本乙女宛て ②慶応2年8月16日森玄道・伊藤助太夫宛て ③慶応3年9月20日木戸孝允宛て</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">     </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center; margin-top: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">「新国家」書簡</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">①</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">②</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">③</div> </div>
<p><b>【疑問14】</b> 同日付で林謙三に宛てた書簡(県立歴史民俗資料館所蔵)と見比べた場合、これが同一日に同一人物が書いたと言えるかどうか、一目で疑問を生ずる。</p>	<p>龍馬は書簡によって文字の書き方が丁寧だったり、乱雑だったりする。「越行の記」の文字と照らし合わせても、同じ人物が書いたのは明らか。字画も一致しており、筆跡からして文机で丁寧に書いたと考えられる。</p> <p>家族宛の書状に比べれば書体は綺麗で丁寧だが、越前藩の重役中根雪江に出すのであるから気を使って書いて当然。中根にこの書状を出すということは松平春嶽に出すのと同意義とみれば書体の丁寧さは当然のことである。したがって墨消で訂正などは行わない。</p> <p>越前藩内において三岡八郎は藩内処分を受けていた身なので、簡単に京都の新政府に出仕させることは難しい状態にあった。そのため龍馬は極めて丁寧に繰り返して中根雪江に三岡の上京を依頼している。したがって筆跡も丁寧になるのは自然。</p>
<p><b>【疑問15】</b> 「相被成」は「被相成」が文法上、正しいはずではないか。</p>	<p>文法上は指摘のとおりであるが、龍馬はこの文法が苦手だったようでありあまり使っておらず、使えば必ず間違っていることが龍馬らしいと考える。</p> <p>※例: 慶応2年2月6日木戸孝允宛て 「万奉謝」(龍馬書簡) →「奉万謝(ばんしゃたてまつる)」(正しい) 慶応3年5月5日三吉慎蔵宛て 「相不成」(龍馬書簡) →「不相成(あいならず)」(正しい) 慶応3年9月初旬佐々木高行宛て 「御為聞」(龍馬書簡) →「為御聞(おきかせ)」(正しい) 「新国家」龍馬書簡 「相不叶」(龍馬書簡) →「不相叶(あいかなわず)」(正しい)</p>



(県立歴史民俗資料館所蔵・画像は複製)  
慶応三年十一月十日林謙三宛て